現代のことば

小原　克博

道徳は教えられるのか？

道徳教育と聞いて、何を連想するだろうか。戦後世代の多くは、義務教育の中で道徳の時間を経験しているはずである。しかし、私自身を振り返ってみても、それによって道徳を身につけたという感触は少なく、周りの人に聞いてみても、あまり芳しい答えは返ってこない。正式な教科の合間に埋もれたかのような、あまり緊張感のない談話的な授業が多かったような気がする。

もちろん、年代によって内容は異なっているに違いないし、無意識の内に道徳観を養われてきた可能性もあるので、自分の経験だけに即して、道徳の時間が無駄であったなどと言うつもりはない。しかし、これまでの道徳教育は不十分だったので、あらためて「徳育」として特別な教科に位置づけ充実させる、と言われると、素直に頷くことができない少々矛盾した自分を見い出す。

教育再生会議が先日発表した第二次報告では「全ての子供たちに高い規範意識を身につけさせる」ために徳育を教科にすることが提案されていた。教科として学ぶ以上、どのように成績評価するのかが争点の一つになってきた。今のところ、点数での評価はしないらしい。

しかし、点数はつけなくても評価する以上、何らかの基準が必要になってくる。先送りされたとはいえ、道徳の検定教科書が作られるかもしれないとなると、望ましい道徳的態度が前提にされるのは自然なことであろう。

望ましい道徳的態度はあると思う。しかし問題は、国家がそれを主導してよいのか、ということだ。教育関係者の中には、昨今の道徳強化の動きを、戦前の国家主義的な修身教育への接近として危惧する者が少なくないが、それを単純に杞憂と見なすことはできないだろう。かつて、道徳は「高い規範意識を身につけさせる」ために国家が用いた最強の道具であったからだ。教育勅語に象徴される国民道徳が、信教の自由や思想・信条の自由をも凌駕する最高の秩序原理とされていた歴史を忘れるわけにはいかない。

点数の有無にかかわらず、いったん評価の対象となれば、子どもたちは、何が大人たちの期待する「答え」なのかを容易に見抜くことだろう。ここに道徳教育の皮肉な逆説がある。多様な価値の中で、どのように

村田　好謙

して異なる意見の者と妥協したり、協調したりするのか、といった道徳的判断が現代社会では求められる。つまり、単一の正しい「答え」など存在しないことを受けとめられる道徳的タフさを養う必要があるのだ。ところが、道徳教育において望ましい答えを暗に要求することになれば、皮肉にも、今日必要とされる道徳的判断の根源的なエネルギーを奪い去ることになってしまいかねない。

子どもの評価だけでなく、現場の教師たちが、徳育にどのように納得し、満足しているのかを評価し、開示する仕組みも必要だろう。道徳は教えられるのかという不安を抱きながらも、少なくとも徳育には、教育の現場が抱える悩みや矛盾や希望を映し出す「鏡」のような役割を担って欲しいと思う。

（同志社大教授・キリスト教思想）